高等学校英語教育へのTask Based Language Teachingの導入に関する一考察
:「論理・表現」における「真正の学習」の保障を目指して

学籍番号　229348
氏名　中川　佑介
主指導教員　田中　真秀
副指導教員　南野　起一

1.はじめに

1-1:問題意識と課題設定

授業設計における「活動主義」の過ちは，「主体的・対話的で深い学び」に代表されるような昨今の教育観においては,特に留意すべき課題として見受けられる。英語教育における言語活動等もその例外ではなく，「討論」や「交渉」など活動の形態面（手段）ばかりに焦点が当てられ，活動を行う目的となる「コミュニケーション能力の育成」等の軽視には懸念が寄せられている。したがって，言語活動の内実を充足させ，適切に行うことが求められるが，言語活動の充足には様々な方略が考えられる。「言語活動の切実性」はその一つであると考えられ，「生徒が作業的にこなすのではなく，活動の意味を自分ごととして捉えられる切実性のある言語活動」を開発ないし実施することができれば，活動主義の課題を克服できるのではないかと見立てた。

そこで，本稿では「真正の学習」の理論に着目し，多くの言語活動への取り組みが想定できる「論理・表現」への導入を検討した。その上で，「真正の学習」とTask Based Language Teaching(以下，TBLT)に見受けられる「真正性（現実性)」への志向という共通項を手掛かりに，日本の英語教育において主流ではないTBLTを導入することで，「真正の学習」を保障することができるのではないかと考えた。

1-2:研究の目的と方法

本研究では研究目的である「高等英語教育へのTBLTの導入」に関して検討するために,「『論理・表現』の授業におけるTBLTの理論に沿った実践とその省察」と「『タスクらしさ』の観点による教科書分析」という二つの研究課題を設定した。「高等学校英語教育における『タスク』を中心にした授業実践はどのような様相を呈するのか」と「『論理・表現』の教科書とタスクの関連性はどのようなものか」という二つのリサーチ・クエスチョンを両輪に，「高等英語教育へのTBLTの導入」に関する検討を行う。

2. タスク・ベースの授業実践

授業実践の詳細な内容は、実習校の情報等が含まれているため要旨への記載は省略する。

2-1:タスク・ベースの授業実践の成果

二回にわたる授業実践は，TBLT に期待される「自発的な表現・理解」はある程度充足させることができた。また，言語活動が文法指導に先行する授業及び「後出しの文法指導」の在り方に関する知見を深めることができた。

2-2:タスク・ベースの授業実践の課題

「真正の学習」を目指した当該授業では，「タスク」という内容面では「本物らしさ」をある程度再現できたが，指示や説明などでも「真正性」を強調することができた。

また，生徒の感想に多く見られた「単語ベースの英語」については，今回のような単一の授業ではなく，タスク・ベースの単元計画の検討が課題として残った。

3. 教科書の「タスクらしさ」分析

3-1:教科書の「タスクらしさ」分析の概要

実習校の「論理・表現」において使用されている二冊の教科書に記載されている言語活動が「タスクらしさ」を判断するための五つの観点（「Interaction」「Meaning」「Outcome」「Authenticity」「Interest」）から分析した。

3-2: 教科書の「タスクらしさ」分析の結果

どちらの教科書も「Interaction」「Meaning」「Outcome」の観点においては先行研究と同様の結果が得られ，「その先の目的（その言語活動を通して，何を成し遂げたいのかが判然としない活動が，ある程度見受けられた」といった見解を述べた。また，「Authenticity」「Interest」という「真正の学習」に関連する観点においては，「目的や場面，状況が判然としない言語活動及びその設問」を指摘し，そのことが「真正性の欠如」に関与しているのではないかといった検討をした。

4. まとめ

4-1:タスク・ベースの授業実践に関する今後の展望

今回の授業実践の特殊性に着目し，「(1) 通常のクラスサイズ（40 人規模）で行う場合」，「(2) 創案系タスク・ベースの授業」，「(3) タスク・ベースの単元，年次計画」の三点を今後の展望として挙げた。特に「(3) タスク・ベースの単元，年次計画」については，TBLT を OPPA に関連付けた単元計画の在り方に関する見解を示した。

4-2:教科書の「タスクらしさ」分析に関する今後の展望

教科書分析の課題となった「客観性の不足」と「分析と実践の関連付け」を踏まえ，複数人で分析を行うことによる「判断基準の相対化」と「分析結果を踏まえた『タスクらしさ』や『真正性』の向上」を今後の展望の指針として挙げた。